もつ磁力の強さ。多くの人びとはそれを再認識することで、これまで決して語ることのなかったまちづくりについて語りはじめているし、県や市町村が提示した防潮堤の高さや規模についても疑問を提出しはじめている。また多くの地域では、すべてを無くした人びとが協力してNPO法人や社団法人を立ち上げて、相互扶助にもとづく新たな経済活動を開始するようになっているのである。

このように、ひとつひとつの悲しみを回収するだけでなく、人びとを未来に向かう行為へと駆り立てる力をもつ地域（あるいは地域コミュニティ）に対し、被災後に「宗教」が占めえた場はきわめて限られていたように私には思われるのだ。もちろん、どの地域でも死者を悼むための儀礼が欠かされることはなかったし、それを遂行するためにこそ、家も財産もすべてをなくした人びとは大変な努力を払ってきたのだった。しかし、そうした儀礼としての側面を別としたなら、「宗教」は被災者の心にどれだけの垂涎をおろすことができたのか。それは、被災者の悲しみを包摂するために、いかなることばを新しくつくりだすことができたのか。それを考えると、私には「宗教」が今回の被災後に大きな役割を演じえたと言うことはできないのだ。

ひょっとしたら「宗教」とは、地域に回収されない人びとを受け入れるための受け皿なのかもしれない。そして、未曾有の災害に対して未曾有のことばを作り出すことのできなかった既存の「宗教」は、今回の被災を契機に大きく変わっていくのかもしれない。

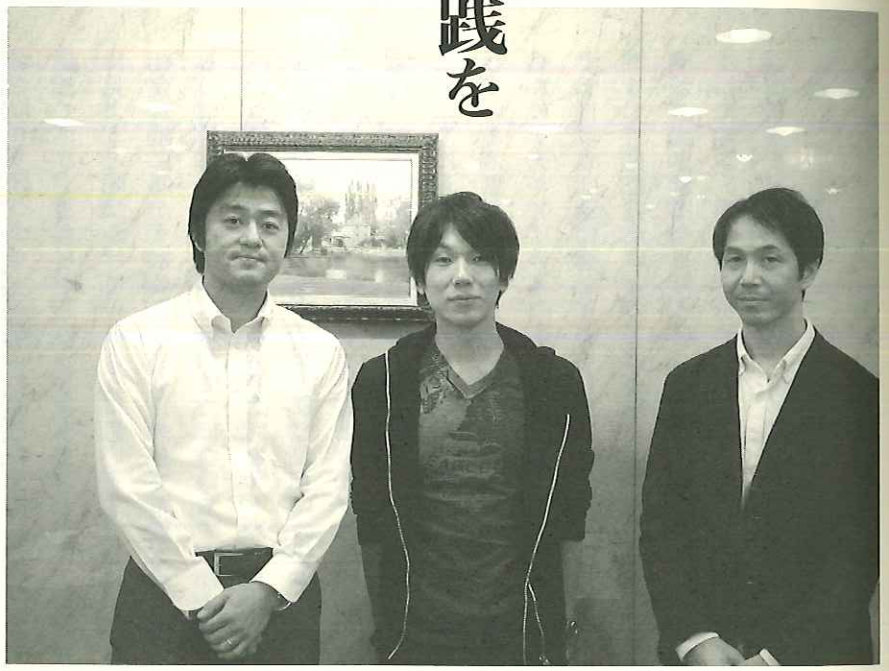
（この文章は、二〇一三年一月に出版された拙書『被災後を生きる――吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』と一部重複している。同書のなかでは固有名詞を出しているが、本稿は悲痛な語りを取り上げているので、匿名にしている。）

対談

宗教への期待、若者への期待

―過剰な期待よりも実践を

稲場圭信（いなば けいしん）
古市憲寿（ふるいち のりとし）
［司会］堀江宗正（ほりえ むねまさ）



■ 希望と絶望の間で

堀江　今日（二〇一二年一〇月一五日）の対談は、古市さんが『週刊読書人』の「論潮」の中で、「宗教的なもの」への期待をあおるメディアに対して、「あまり期待しすぎてはいけないのでは」とクールダウンを呼びかけていたのを知ったのがきっかけで企画しました。[1] また、古市さんは「すぴこん」やパワースポットにも関心があって調査なさっているということを伺っており、宗教やスピリチュアリティについても関心があると思ったからです。

一方の稲場さんは、僕の見方では「希望を語る人」です。震災後の宗教団体が被災地に行って社会貢献的活動をしているという、一般にあまり知られていないことを拾い上げて紹介しつつ、今後の日本社会と宗教がどのように良い方向に協働していけるかを考え、提案していらっしゃいます。[2] ですから、宗教にポジティブな期待を持っていると思います。それに対して古市さんは、「絶望を語る人」と言ってはおかしいですが（笑）、著書『絶望の国の幸福な若者たち』の中では、幸福感を感じている若者を取り上げつつも、「絶望」の国という状況とセットで論じています。[3] どちらかというと物事をクールに、客観的に見ようと呼びかけているように思います。稲場さんは社会貢献に向かう宗教にフォーカスして希望を語っているのに対し、古市さんは宗教的ではないですが社会貢献への意欲が高まりつつある若者たちをクールに見ている、というのが僕の印象です。まずは、お互いの仕事をどのように見ているか、稲場さんからお話しいただけますか。

稲場　『絶望の国の幸福な若者たち』はすでに読んでいて、非常にシャープにデータを集め、精緻な議論を展開していると思っていました。私も、ヨーロッパの若者論やスピリチュアリティの議論にはあまりピンと来ておらず、日本では世代論などよりもむしろ世代を超えたカテゴリーで見た方がいいのではと思っていたのですが、古市さんはまさに今までと違った論調で面白いと思います。ピースボートについても面白いフィールドワークだと思いましたし、他にも消費論についての論考などもあって、色々なことに目配りし、感性豊かにキャッチし記述している点がすごいと思います。テレビなどでもご活躍されていますが、ぜひ、素顔や本音、現代社会への見方なども聞けたらいいなと、今日の対談を楽しみにしていました。

堀江　ありがとうございます。古市さんはいかがですか。

古市　僕は宗教学の本にはあまり目を通していないのですが、二〇〇九年の『社会貢献する宗教』を読んで「宗教」と「社会貢献」の関わりは確かに面白いなと思ったことを覚えています。[4] 稲場さんは、震災後に色々なメッセージを発信され、宗教者災害救援ネットワーク[5]を立ち上げられていると伺っていて、実際に活動をされる方だという印象です。研究者はどうしても研究だけをして終わりという方が多くて、そういった姿勢には僕自身違和感があります。しかし稲場さんは、今の時代の研究者が震災以後のネットワークを実際にどう活用できるのかということを真摯に考えるだけでなく、実際に活動されているということがまず印象的でした。

堀江　フィールドに肉薄しようという志向はお二人に共通していますね。

古市　僕は結構突き放して見てしまいますが、稲場さんはその上で何ができるのかということを建設的に考えていらっしゃると思います。たとえば、宗教団体が反原発・脱原発といった色々なメッセージを発信していることについて、稲場さんが、是非はあるものの、電力会社にも宗教の信者はいるはずなので、宗教団体としてメッセージを発信することの意味は大きい、とコメントされている新聞記事[6]を読みました。宗教というものがどう社会にポジティブなインパクトを与えられるのかということに、価値判断まで踏み込んで意見を発して、またそれがすごく一貫しているというのが僕の印象ですね。

稲場　フィールドに入るといろいろな宗教者の声が聞こえてきます。信者の中にも電力会社で働く人がいて、自分の価値観や生き方と仕事との間で悩み、ノイローゼになってしまう人もいるのです。そういう中で、いくつかの宗教団体がメッセージを発したのですが、これは簡単にできることではない。時代が変わるのではないかとコメントしました。

古市　3・11をきっかけにこれで日本はガラッと変わるなどと期待をするような人について、僕の本で少し揶揄

古市憲寿氏

して書いたことがあります。特に3・11を機に意見が変わった人はあまり信用できないなと思っていて（笑）。逆に、稲場さんはすごく一貫していると思います。宗教と社会貢献というテーマを軸に、ぶれずに研究し、震災後も発信をしていて、その意味で信頼の置ける方だなと思いました。

稲場　私は、宗教団体や宗教者だけではなく、スピリチュアリティとか「無自覚の宗教性」と私が呼んでいる、自分は宗教的ではないと思っている人たちの中にも、宗教的なものがかなりあって、それが何らかの形で社会を良くすることに寄与していくのではという希望を持っています。絶望よりも希望を、と（笑）。古市さんは「絶望」という言葉を使ってはいますが、気負わずに自分の生き方をしていく中で社会が良くなる志向性もあるのでは、ということをシャープにおっしゃっているということではないでしょうか。

古市　聞こえのいいことを言って自分は何もしないというのは、僕はあまり好きではないんです。「だったら自分でやっちゃえばいいじゃん」と思います。大きなことではなく、実際に今自分のできる範囲でやったほうがいいのでは、とは思いますね。

一　宗教への期待

■　宗教心と利他主義の相関

堀江　この対談のテーマは、「宗教への期待、若者への期待」としています。現在、宗教はある意味でマイノリティであり、また若者も人口的には周縁化されつつあります。周縁は中心から軽視される存在であると同時に、変化が起こる場所とも目されますが、宗教にも若者にも、ポジティブな言説とネガティブな言説の両極端が向けられがちです。それと同時に、団塊の世代に象徴される世俗的な物質文明が行き詰まりを見せている現在、これからの未来を考える上で、宗教と若者が重要なテーマとして浮上するのではないかと考えています。

稲場圭信氏

そこでまず、稲場さんの今までのお仕事から話を始めたいのですが、稲場さんは宗教に対してポジティブに「期待」を寄せていますね。震災より少し前くらいから、宗教に関する特集を組むと雑誌が売れたり、宗教関係の教養書が売れたりという傾向があって、メディアのレベルで宗教に対する関心は高まっていると言えると思います。

ところが一方で、六月頃にNHKから発表された「東日本大震災で日本人はどう変わったか」という意識調査では、「宗教とか信仰とかに関係していると思われることがらは、何も信じていない」と言う人が有意に増加しているという結果が出ています。[7] 実は、阪神淡路大震災の時にも、オウム事件の影響もあって、「信じない」と言う人が増えたのですが、その後二〇〇〇年代に持ちかえしてきた。そしてまた今回も、震災を機に「信じない」と言う人が有意差で増えているのです。色々な見方があると思いますが、もしかして震災の後、信仰心は統計的にいったん低下するが、徐々に宗教への関心が高まるということがあるのかもしれません。

また一方で、宗教者の現状もすごく変わっていて、被